

戒名は必要ない？

読売新聞社が、冠婚葬祭に関する世論調査を実施したところ、多くの方が、冠婚葬祭は簡素に行った方が良いと考えていることが明らかとなりました（4月7日付読売新聞）。

特に、法要については96%の人が、葬式については92%の人が簡素に行う方が良いと考えているようです。

また、慣習やしきたりについても、法要については59%の人が、葬式については58%の人がこだわらなくても良いとしています。そのせいでしょうか、通夜や告別式を行わずに直葬することについても、72%の人は特に問題ないとしていますし、散骨など新たな埋葬方法も82%の人は問題ないとしています。

更に、自分の葬式を仏教式で行う場合、戒名が必要かどうか聞いたところ、必要ないという人が56%となっており、必要だと考えている人（43%）を上回っています。

戒名（宗派によっては法名）というのは、仏弟子となった者に与えられる名ですから、本来は受戒して仏門に入った者にしか与えられないものですが、後世、生前は仏教徒でなくても、死後形式的に受戒の作法を行い、仏教の帰依者として葬儀を行うようになったものといわれています。

死者に戒名をつけるというのは、故人が迷わず成仏するように、仏の弟子として西方浄土に旅立てるようという、残された者の思いが形になったものだといえるでしょう。

しかし今日では、戒名は、僧侶が死者につける名前という程度の認識しか持たれていないのが実態だと思います。

戒名について、その宗教的な意義を理解せず、単に死者につける名前という程度の形式的なものに過ぎないと感じれば、そんなものは必要ないという人も出てきて不思議ではありません。葬儀を出来るだけ簡素にしたいという人が増えている背景には、地域のコミュニティが力を失ってきたことと無縁ではありません。

私が子供のころは、葬儀屋さんも葬祭場もなく、会場は町内会館で行っていましたが、葬儀委員長は町内会長、食事の用意は町内のおばさん方が手分けしてやっていました。町内というコミュニティには、葬儀を行うだけでなく、しっかりと遺族を支えていく仕組みがあったように感じます。

しかし今日では、町内の人間関係も希薄になり、葬儀の際のお手伝いを頼むことも難しくなってきましたので、田舎であれ、都会であれ、葬儀社に丸投げした形で葬儀が行われるというのも致し方ありません。

葬儀社が葬儀を仕切るのが当たり前になってくると、葬儀の儀式化が一層進むことになり、その分、宗教的な意義が薄れていくことは避けられません。そして、儀式化すればする程、出来るだけ簡単に済ませたいと考える人が出てくるのも当然です。

ただ、葬儀は単なるイベントではありません。確かに葬儀は儀式ではありますが、それは死者を悼む悲しみの儀式なのです。

この悲しみの儀式が何故必要なのかということについて、漫画「死化粧師」のモデルでもある橋爪謙一郎氏は、葬儀というのは

- 1 遺された人達が改めて故人の人生を振り返ることが出来る機会である
- 2 故人に感謝の念を抱く場である
- 3 悲しい、悔しいといった思いに遠慮なく浸れる時間である
- 4 霊の処理や供養などを念じて死者を送る儀礼である

と述べています（同氏著「お父さん、葬式はいらないうって言わないで」から）。

また、橋爪氏は、「自分は明確な信仰があるわけではないから、葬儀は要らない」という人は、4番目の意義だけを取り上げて、宗教的な意味が失われたから要らないといていることになる。それは、ことさら葬儀の意義を矮小化しているのではないかと述べています。

4番目の「霊の処理や供養」といった宗教的な要素についての受け止め方は、人によって様々だと思いますが、御通夜、告別式、初七日、四十九日と悲しみの儀式を重ねていく中で、残された人達は少しずつ、悲しみと向き合い、心の整理を付けていくことが出来るのだと思います。

葬式は、遺された者が故人を偲び、送る為の場だけではありません。遺された人と人との絆を再確認する場でもあります。

そう考えると、自分が死んだ時、どのような葬儀が望ましいのか、今のうちから考えておくのは決して無意味ではありません。（塾頭 吉田 洋一）